

# 研究会報告

2012年9月15日（土） 定例研究会報告

テーマ： 労働組合の変貌

—非正規労働者の組織化と個人加盟ユニオンを中心とする研究動向の検討—

報告者： 兵頭淳史（社研所員／経済学部教授）

時間： 14：00～17：30

場所： 専修大学社会科学研究所神田分室

参加者数：15名

報告内容概略：

個人加盟ユニオンは2008-9年の「派遣村」を経てますます社会的な認知度を上げ、今日の労働問題について論じる上でもはや避けて通ることができない程度の重要な位置を獲得する一方で、著名なユニオンのなかにも主として財政的な面から活動・組織維持が困難に陥る例が現れたり、争議の金銭解決後に、争議当事者と組織との間に解決金をめぐる紛争が生じたりする例も現れている。これらの現象は、かねてより指摘されていた個人加盟ユニオン特有の問題が尖鋭な形をとって顕在化したものとみることもでき、そうした構造的問題を克服しうるか否かが、今後のユニオン運動のゆくえや、それが今日労働社会において果たしている機能を今後もよく担いうるかどうかを左右する可能性もある。

また、既存の企業内労組の存在形態や行動にも、長期化する雇用・労働不安のなかで、萌芽的・部分的にはあれ変化が生じつつある。少なからぬ企業内労働組合による非正規労働者の組織化への取り組みなどはその典型と言える。とはいえ、そうした変化が量的・質的に労働組合全体のありようを、ひいては労働社会を変化させるまでに至るか否かは、依然として不透明である。

記：専修大学経済学部・兵頭淳史

2012年10月3日(水) 定例研究会報告

テーマ： 「シェーナウの想い」～自然エネルギー社会をこどもたちに～  
上映会とトークセッション

報告者： 都筑 建 (太陽光発電所ネットワーク(PV-Net)事務局長)

時間： 18:45～21:00

場所： 専修大学神田校舎 731 教室

参加者数：31名

報告内容概略：まず、ドキュメンタリー映画「シェーナウの想い」のあらすじを記しておく。ドイツ南西部にある小さなまちシェーナウ市。チェルノブイリ事故後、シェーナウの親たちがこどもの未来を守るため、自然エネルギーの電力会社を自ら作ろうと決意する。彼らは2度にわたる住民投票によってシェーナウ市の電力供給の認可を勝ち取り、1994年1月16日にシェーナウ電力会社(EWS: Elektrizitätswerke Schönau)を発足させた。ところが電力網をラインフェルデン電力会社(KWR)から購入しなければならず、当初KWRは4.5億円の法外な金額を吹っかけ、後に1.5億円値下げし、住民たちからの寄付、社会目的に積極的に融資をするGLS銀行からえられた協力によって電力網を買い上げることができ、97年7月にEWSは電力供給を開始する。同社は学校の屋上、町のシンボルの教会屋上にも太陽光パネルを設置し、住民運動の反対派もこの設置には協力するようになり、原発に頼らないエコな電力を供給するEWSはシェーナウ市以外の住民からも幅広く支持され顧客が増大している。以上1時間の映画のあらすじである。

この研究会には30名を超える参加があり、一般参加者については比較のお若い方が多かった。なかにはご夫妻で参加された方々、親子で参加された方々もみられ、この映画並びに再生可能エネルギーへの関心の高さが実感された。上映後、参加者が各々感想を述べ、それらを受けて都筑建氏がこの映画の背景、さらには日本でのエコ発電の現状をテーマに講演し、フロアーからの質問に答えられ<sup>i</sup>、今後の電力体制を考えていく上で示唆に富む研究会となった。

記：専修大学経済学部 宮寄晃臣

---

<sup>i</sup> なかには、発送電技術が電力独占企業に偏在しているなかでEWSはどのようにその技術を蓄積していったのかという質問があり、都筑氏は1) EWSは当初技術者を公募によって採用したこと、2) 現在では独自の研究所を開設運営し技術の向上に努力していると回答された。